

## 学会長講演

構成主義からの保健・健康科学の試みと  
日本的な感性の再発見

守山正樹（福岡大学教授）

座長：横山和仁（順天堂大学教授）

日時：2011年11月23日 09:20～09:55

場所：福大メディカルホール

## 学会長講演

### 構成主義からの保健・健康科学の試みと日本的な感性の再発見

守山正樹

福岡大学医学部衛生・公衆衛生学教室

Constructivism（構成主義）との出会いは教養課程から医学部に進学した2年目、公衆衛生学の学生自由研究の時です。女子高で思春期の認識発達を主題に調査を企画した際、恩師（故 鈴木継美先生）から勧められた本が「思考の心理学、ピアジェ」と「教育の過程、ブルーナー」でした。思い出深い本ですが、当時は二冊の背景にある思想の意味などは、分かりませんでした。

東北大学医学部大学院では「思春期の発育」を、79～81年に学んだテキサス大学では「人類学と発育」を、81年に就職した長崎大学でも「身体発育」を研究主題に選びました。その後発育から「地域保健の現場での対話と教育」へと関心が広がりました。特に興味を持ったのは「人が感じ考える内容を可視化・言語化し、理解を深め、対話を促進し、共通理解を育てること」でした。

1980年代はパーソナルコンピュータの第一次世代が普及し始め、計算能力が上がったコンピュータを駆使する多変量解析が一般化し、行動科学や社会心理学の理論も進化し、人の内面を、外からの質問への答えから推測する方法論が、長足の進歩を遂げた時代でした。行動科学の分野で発展して来た、十～数十個の質問に「はいいいえ」あるいは「1, 2, 3, 4」などと答えるだけで、性格など多様な心的傾向を数値化できる方法論は、とても魅力的に感じられ、そうした方法を中心に用いた時期もあります。そのうち徐々に「人が考える内容を、直接的・個別的・具体的に知ること」に関心が向かい始めました。事象の尺度化に加えて「事象を文章や図に描いて理解すること」が、数値化に加えて「数値が持つ意味を可視化し、それを元に人々が交流すること」が、自分の中で重要事となり、行き着いたのが長崎の離島高島で炭鉱閉山時に行った「健診結果を顔の絵（手書き顔グラフ）に描き、対話を促進させる研究」でした。

こうした方向の研究で印象深いのは、アメリカのAERA（米国教育研究学会）で手書き顔グラフを発表した際、参加者から「あなたの研究はConstructivismに基づいている」と指摘されたことです。当時はまだネット検索などの方法も無く、言われた意味が直ぐには理解できませんでした。その後の年月が流れる中、少しずつ強くなってきたのは、ピアジェやブルーナーなどの人々が初期に寄与したConstructivismの研究の流れに、自分もどこかで連なっている、という気づきです。顔グラフから始まる試みを「対話からの地域保健活動、篠原出版」に

まとめた際、「これは保健や医療を一步人間的にする試みだね」と言って下さった鈴木先生の言葉が忘れられません。

人間を理解する上で、特に心の理解は大切なことです。行動科学から開発された尺度には、自尊心、自己効力感、性格、孤独感、信頼感、生きがい、死への態度、抑うつ、ストレスなど、多くのものがあります。これらを駆使することで、「心の一側面」を数値化し、いろいろな集団を取り上げて、「心の一側面」と「別の何か」とを次々に関連させて行く研究も可能になります。その一方、直接に対象者の話を聞いて、認識や心を個別的・事例的に深く理解することにも、別な魅力があります。しかしこうした方向の研究は、結果が質的な情報として得られる場合が多く、また例数も限られます。そこで「人が感じ考える内容を外化する方法」を開発し、その新方法を適用して見出される個々人の個性的な理解や、そこから組み立てられる小集団の理解に焦点を絞り、「開発研究&事例研究」で論文を書く試みを続けて来ました。こうして出来上がった方法として、最初のものである手書き顔グラフは、顔の所作を利用して個々人の検査結果を可視化し交流を促進する方法でした。次の二次元イメージ展開法では、感じ考える内容を平面上で横軸方向に配列、縦軸方向に展開し、展開図から食・生活・環境などの主題について、全体像を可視化し、対象者間の相互理解促進を試みました。また Wify では「無くなったら困る大切なものは何か」と三回質問を重ねる中で、世界観や価値観の可視化や共有を試みました。

数値尺度を集団に適用する行動科学的な研究や疫学的な研究では、研究者が対象集団に対して樹立するモデルに基づいて研究がなされます。研究者は能動的にエビデンスを得たり、解釈したりする側の立場に立ち、対象者は研究される側に立ちます。一方、Constructivism の流れで研究する際は、対象者の物の見方・感じ方に学び、変化や成長の過程を観察し、共に考えることが、研究の中心になります。現実の生活の中で混沌としている事象を、より明瞭に理解し問題解決を目指す場合などに、威力が発揮されます。対象者同士の交流から発見がなされ、新たな社会的な動きが始まる場合もあります。状況に依存しやすく、一見迂遠な方法ですが、このような「現実を見つめ、考える」方法論は、Health・Wellbeing・QOL・Stress など欧米の研究者が欧米語で考え、定義した概念を、私たちの文化の中で、私たち自身で再考することも可能にします。二次元イメージ展開法に関しては、言葉や絵のカードを配列展開するだけでなく、日用品などの実物を用い、手の触覚を介して作業することにより、幼児や高齢者から視覚や聴覚の重複障害者までもが、共にバリアフリーに健康や生活を考えられるようになり、「日本人らしさ」等の文化的・感性的な課題へも接近が可能になりました。Constructivism の見方が、もう一步日本の保健や医療の科学に導入されることを願っています。